

市民の文芸 年間優秀作品

「市民の文芸」のコーナーに昨年掲載された作品の中から優秀作品が選ばれました。優秀作品をここに掲載し、作者には賞状を贈ります。(敬称略)
※掲載数の都合上、詩部門からの選出はありません。

俳句 高橋洋一選

玉砂利を踏み音澄めり寒の宮
(富岡) 黒澤 克美

評・正月の雑踏の中での初詣と違い、寒中の境内の鎮もりは神々しい。玉砂利を踏み音も一際澄んで聞こえる。心まで澄んでくる。

風光る七十路に向く薄化粧
(上高田) 佐藤 順子

評・春になり、野山を渡る風は明るく光る。七十路が近くなっても元氣発射。薄化粧して外出したくなる。春は年齢を忘れさせる。

源平の蛭仲良く水の闇
(富岡) 小池はるみ

評・蛭には源氏ほたと平家ほたるが居て、ほぼ同じ時期に舞うが、源氏ほたるが大型。清流の漆黒の闇が、蛭の浄土である。

川柳 荻原亜杏選

国難は形を変えてやって来る
(富岡) 大河原富美

評・人間は一生の内に一度は大きな試練に遭うのかも知れない。しかしこのコロナ禍による世界の混乱、衰退は、想像すらできなかった。

元気でね長生きしてねと子守させ
(七日市) 小坂橋光雄

評・いかにも皮肉な句である。しかし世の常である。祖父母による孫の子守、だが孫は可愛い。しかし見る親も相当疲れてはいるのだ。

人通り少し戻って店は消え
(富岡) 金井 君代

評・現実の悲惨さがよく表われている。GOTO イートで、人通りも多少戻った。しかし採算の取れない店は、もっそこには見られない。

短歌 杉山郁子選

猛暑日も静かに重さ増す稲穂水を案じて夫は田に行く
(上高田) 佐藤 順子

評・暑さの厳しい夏、暑さに耐え稲は静かに実りの秋に向けて実を太らせていく。農に生きる作者と夫の優しい気持ち心が打ちます。

夫が裁ち娘がミシンかけ思い出の端切れは手づくりマスクに変身
(七日市) 新井 逸子

評・コロナウイルスの感染によりマスク不足となり人々は慌てた。知恵と協力で対応する力強さ。今でなくては残せない短歌です。

リュック背に乗り合いタクシー待つバス停足元の花に雨は降りつぐ
(七日市) 細山 洋子

評・雨の日、移動手段としての乗り合いタクシーを待つ作者。自分で運転する人には気付かない深い心を表現しています。

漢詩

白鳥忠彦選

閉門 門を閉ざす (高瀬) 小間 才子

悪疫蔓延魂欲消 悪疫 蔓延して魂 消せんと欲す
空看灼灼牡丹搖 空しく見る 灼々として牡丹搖るるを
未開門戸熱居裏 未だ門戸を開かず 熱居の裏
惟羨花陰一野猫 惟だ羨む 花陰の一野猫

評・コロナ禍による時事を早速取り上げ、漢詩に仕立てあげる作者の伎倆に敬服！牡丹の花が咲くも、外出自粛でまならぬ人間を横目に、のら猫はお構いなし。あやかりたいものだ。

客中間杜宇 客中杜宇を聞く (富岡) 古閑 政男

破窓残月一痕青 破窓の残月 一痕の青
枕上思家宿草亭 枕上 家を考えて 草亭に宿す
何處蜀魂驚客夢 何れの処ぞ 蜀魂 客夢を驚かすは
誰憐晚歲日無寧 誰か憐れまん 晩歳 日に寧んずる無きを

評・作者の故郷は遠いと聞けが、杜鵑(蜀魂)も自分の故郷に帰りたいと鳴くとか…。ましてや他郷で仕事に追われ、日々忙しいとなればなおさらである。転結に胸打たれる思いがする。

月下飲酒 月下 酒を飲む (七日市) 石原 満志

西風颯颯夕陽沈 西風 颯々 夕陽沈む
靜寂籬邊促織吟 靜寂なる籬辺 促織吟す
氣爽又逢詩酒友 氣爽やかにして又逢う 詩酒の友
月華皎潔話幽襟 月華 皎潔 幽襟を話す

評・作詩は、前二句で場面作り、後二句で情を詠うのが基本。さりげなく詠っているようでも、転結を見ると、月明かりのもと、友と詩酒談義に花が咲いている様子がよくわかる。

「市民の文芸」選者の作品

詩 宮前 利保子

中秋の名月

夕闇にとざされた玄関口から 声がかかる
宮前さん来て 空にすごいものが
あわてた女性の声は 言葉足りず呼びかける
スリッパの儘でると 低い空気が肌を射す
外は暗闇ばかり なんにもない
もっと前へ一歩 もっと前へ

天井の屋根裏を 一足毎に踏み出していく
庇の先に現われ出たのは 中秋の名月
はっきり浮かぶ まんまるの月
その右下に 名も知らぬ一等星が 光る

わあ満月だ 九十歳を越えた人達の歓声
危ないから見るのを止めなさいの
老婆心の声 神秘の中でふれた満月の美しさ
良かったと胸を抱く 久保さんの姿が
いつまでも 私の心から消えない

(選者から一言)

暫くお休みをいただき、ご心配をお掛けしました。また選者としてお世話になりますので、引き続きよろしくお願ひ申し上げます。

俳句 高橋洋一

千手観音どの手も春を招きをり
早口に快癒を祝す初燕
七夕や筆まだ持てぬ後遺症

川柳 荻原亜杏

新年をマスクで祝う不気味な世
結婚も葬儀も小さい群れとなり
ともかくもコロナ認めて生きる術

短歌 杉山 郁子

ひと口の温きあまさけ喉をすぎ胃の腑にとどく ああ生きていく
綿の実は握りこぶしを開くごと爆ぜて膨れてふわり綿帽子
右は信州左は武州と聞きながら続く紅葉の山脈のぞむ

漢詩 白鳥忠彦

菊 今日 菊 今日 初めて開く 籬畔の花
傲霜佳色十分加 霜に傲りて佳色 十分加わる
雪姿獨立人皆醉 雪姿 獨立 人皆酔い
欲寄奇芬月下詩 奇芬を寄せんと欲して月下に誇る

詩訳・かきねのあたりで今日やっと菊の花が咲き、その色は霜にあたった分、かえて美しくなっている。真っ白な姿で、抜きんでいている様子に多くの人が心を奪われ、月明かりのもと、得意気に良いかおりを送っている。